アフリカの今

県人支援の現場から

ザンビア編 ①

成長の中 格差広がる

進む都市化

陽気な音楽が車内に鳴り響く。停留所に止まるたびに乗務員が飛び出し、まるでバーゲンセールの売り子のように道行く人たちに乗車を呼び掛ける。

2月中旬、アフリカ南部ザンビアの首都ルサカで、市民が乗り合うミニバスに揺られていた。国際支援に取り組む吉野川市山川町のNPO法人TICOが、唯一の海外事務所を置く街だ。

「ザンビアを知るならミニバスでダウンタウンに出掛けないと」。2012年1月から現地事務所で働く瀬戸口千佳さん(29)=神戸市出身=に勧められ、宿泊所の近くから一緒にバスに乗り込んだ。

ダウンタウンに向かう道路脇には巨大な商業看板が立ち並んでいた。自動車、化粧品、貴金属―。人口170万人の大都市だけのことはある。

「でも、ここ数年で看板が増えたんですよ」と瀬戸口さん。銅の生産を核に、農業や観光業で多角化を図るザンビアの経済は近年勢いづいている。しかし、所得が1日1・25ドル未満の貧困層は依然として60%を超え、農村では80%近くに上る。貧富の格差は広がり続けている。

光と影を抱えたザンビアのダウンタウンは活気にあふれ、食料品や電化製品の露店が道端に延々と連なっていた。そこで、もう一人のTICOスタッフ、田村幸根さん(29)=三重県桑名市出身=と合流した。12年7月から赴任している保健医療の専門家だ。

TICOの現地スタッフは瀬戸口さんと田村さんの独身女性2人。事務所はダウンタウンから西へ20キロの富裕層が多い地域に構えている。高い塀に囲まれ、24時間体制の警備員付き。アフリカ南部の国際支援団体や裕福な家では一般的とはいえ、やはり物々しい。

「若い女性だけで怖くはないですか」と聞いてみた。2人は「防犯対策を徹底していれば、不安はありませんね」ときっぱり。「それよりも、行政とのやりとりに頭を悩ませます」とこぼした。

ザンビア政府のずさんさは広く知られる。あまりの使途不明金の多さから、09年に世界エイズ・結核・マラリア対策基金がザンビア保健省への助成金を打ち切ったほどだ。現在、TICOの活動はルサカから100キロ離れた農村地域の保健医療支援が中心だが、政府からの人材派遣が口約束だけで一向に進まないこともしばしば。「一体、誰のための行政なのか」。憤りを感じながらも、粘り強く交渉していくしかない。

TICO事務所で仕事に励む瀬戸口さん(左)と田村さん=ザンビアのルサカ

徳島に縁もゆかりもなかった2人はホームページを見てTICOを志した。「途上国を『助ける』という視点ではなく、自らも学び地球市民として生きるという理念に引かれました」。そうした思いが、首都と農村を往復しながらの活動を支えている。

滞在中、そろって大型ショッピングモールに夕食に出掛けた。入り口はハート型の赤い風船で飾り付けられ、カップルの姿も目立つ。「ああ、なるほど。忙しくてすっかり忘れてた」と田村さん。瀬戸口さんと顔を見合わせ、思わず吹き出した。その日は2月14日。バレンタインデーを忘れてしまうほど、2人の女性は日々奮闘している。

◇

ザンビア編ではTICOの取り組みを紹介する。

(藤長英之)